

パンタナール通信

南北米福地開発協会

会報

2010年10月1日

85号



第一〇回国際協力青年奉仕隊活動報告

(八月二十五日～九月十日)

二十五日、成田を出発し、二十六日、巴拉グアイ国首都、アスンションに夕方に到着しました。二日がかりの旅の疲れも見せず皆、元気で、これからの体験に期待に胸をふくらませておりました。アスンションの南北米福地開発財団、佐野事務局長が迎えに出でくださいました。

二十七日はバスで現地に向かつて出発しました。現地までは長旅であるため、途中のドイツ人が八十年以上前に開拓したチャコ地方、ローマプラタで開拓の結果生まれた市の施設訪問と元市長の方から開拓の歴史が紹介されました。最初の四十年間は試行錯誤の連続で、安定して来たのが四十年を超えてからとの話しに開拓の厳しさを感じました。

次の朝早く、南北米福地開発協会の開拓地、レダに向かいました。二ヶ月の間、雨が降らず、空からに乾燥した舗装されてない変化数多くの鳥の群れを見ることが出来ましたが乾燥のため、鳥もほとんどんど見ることが出来ませんでした。

例年であれば、旅の途中で、エコツアーの如く、ツユクを始め二力月の間、砂塵を上げて、走ること七時間、レダに到着しました。

レダ近くになると、パラグアイ川に近くなるために、所々に水たまる場所があるため、色々な鳥の群れの飛来を見ることが出来ました。特に南米を象徴する鳥トーカン（嘴が長くみかん色になつている）の群れが森を飛び姿を見る事が出来ました。レダに到着、飯野先生ご夫妻はじめ、レダで開拓している方々の暖かい歓迎を受け、青年達は長い乾燥した道、ヤシの樹の森が絶え間なく続く景色の後、砂漠の中のオアシスのように現れた美しい土地に感動しておりました。その日は旅の疲れをとり、次の日、早く船で目的地、マジョ村、バイアネグラ市に向かいました。

マジョ村の子供たちとの交流



『カトレセマジョ村に着いた時、一番に村の人々と豚が出迎えてくれました。一緒に荷物を運んでくれたり、喋りかけてくれたりと最初から暖かく感動しました。そのすぐに、うんこが落ちている量にびっくりしました。子供達の中には素足の子もいて、平気で踏んでいたのには心が痛みました。

一日目、作業をしていて昨日は余り喋らなかつた班の子とともに仲良くなりました。言葉は分からぬけれど、豚の絵を描いて『チャンチヨ』と教えてもらつたり、日本語で教えたりと笑いながら覚えた数少ないスペイン語をならべていきました。村の子たちはとても働くので勇気を貢います。愛を貰いました。一人の女の子が私の横を離れません。一緒に遊んだり、先生の話を聞く時も膝に乗っています。背中にじょつて平野さんの横を通つた時、その女の子が『お母さん見たい』と言つていると聞いて納得しました。他の子と遊ぶとすねたりします。だっこしたらもう離れません。私の小さいことを思い出して愛しくなりました。

その日、私は川にはりました。村の人々がどの様な生活をしているのか体で知りたいと思ったからです。私の中ではとても決意がいりました。

しかし、入つて見ると思つていた苦は、そこにはありませんでした。そして、帰る日、船に乗る時、その子を探しました。見つけた時に彼女は『あなたなんかもう知らない』と言つてゐるかのように背を向けました。私は忘れられたのかと思い少し悲しい思いでした。しかし、一緒の班で植樹をした子供達が涙を流して私の名前を呼んでくれていました。

私は愛する為にこの村に来ていたのに、私も愛されていたのかと涙が出てきて、ありがとうという気持ちと悲しい気持ちで一杯でした。バイアネグラの帰りにまたマジョ村に寄つた時、あの小さな女の子は照っていました。忘れられていなかつたとホットし、近づいて抱きしめてあげたかったです。また、同じ班の子供達が泣いていました。会えた喜びなんかまたかいなあと感じました。マジョ村が大好きになりました。

(女性隊員)





最初の印象は生徒達みんな大人見たいだなあつて感じでし
た。実際、みんな一七、八歳だったので、打ち解けるのに難
しい年頃で、すこし、自分は気難しく考えていました。名前
を聞いてもクールに答えるので、笑いがほいいなど感じなが
ら、ないかネタはないか必死に探していました。そんな中で
とりあえず話せば何とかなると思い、日本語を教えたり、ス
ペイン語を教えてもらつたり、何回も生徒の名前を呼んで親
しくなろうと努力しま
した。植樹活動が
始まつて少したつ
た時、一人の
生徒イエルモが
たワイルドカッ
マ曲を流し
れて、良くな
く知つ
いたの
で、言
葉を共
有でき
て、盛
り上が
りまし
た。
全体で
共有出来
かがあれば
それだけで
の見知らなかつ
の中で近く感じる
だと言うことを強く感
じました。それを
きっかけに徐々に雰囲気が良くなつたように思います。一日
はサッカーを彼らのしましたが、みんなボールタッチがう
まくて、ボールをとるのに苦労しましたし、負け試合の方が
多かったです。僕らの精神を見せつけ、パラグアイ対日
本の一般市民バージョンを実現できたことは、交流におい
て大きな良き意味があると思います。このような交流を世界
中でどんどんやっていけるような世界を目指して、自分も頑
張ろうと思います。バイアネグラ市にて（男性隊員）



『ミンガグアス市の活動』
五十校に百本の植樹を！！』のキャンペーンを
市長、教育委員会とともに市庁舎にて行つた。そ
の後、市長と飯野副会長が市長舎前の庭に記念植
樹を行い、その後、市長舎前庭に市の職員の方と
植樹を行つた。また、キャンペーンに参加した学校
を訪問し、学生と共に学校の庭に樹を植えて來た。
校長先生に日本からのプレゼントを渡し、植樹後
は日本の青年と学際との間で、サッカー交流をし
ました。

第10回国際協力青年ボランティア隊

ブラジルの鳥の公園、世界最大の滝イグアスを楽しむ

レダにて釣りと乗馬を楽しみ、開拓の経験（ヤシの樹を伐採）



レダにおいて、魚の養殖を始めるため、
生け簀を掘り、準備する中田先生（左）



国は将来は如何なる青年たちを育てていくかということにかかります。鉄血宰相といわれたドイツを建設したビスマルクは、その国の青年たちを見せてくれたなら、その国の将来を予言できると言いました。

（別紙に続く）

我が南北米財団はRev.サンミコノムーン師のヴィジョンにより一九九九年に創立されました。それ以降、アルトパラグアイ州にて、パンタナールの保全、及び周辺のインディオを中心とする原住民の生活向上のために3つの学校建設を初め、様々な援助プロジェクトを行なってきました。そしてまた、毎年夏休みを利用して、日本やアメリカの青年たちを招待し、現地の人達、特にインディヘナの人たちに対して、教育問題と環境問題を中心に奉仕するプロジェクトを行なっていました。

南北米、パラグアイ・パンタナール地域へのエコツアーナらびに植林活動を通じて生態系の維持と強化を促進し、その地域をモデルとして世界に環境保護の大切さを訴えています。

地球家族として
自然を守りましょう！

南北米福地開発

協会会員の募集

南北米、パラグアイ・パンタナ

ーール地域へのエコツアーナらびに植林活動を通じて生態系の維持と強化を促進し、その地域をモデルとして世界に環境保護の大切さを訴えています。

会費は月五〇〇円、毎月、パンタナール通信を送ります。また、各種のセミナー、エコツアー等の案内をいたします。

南北米福地開発協会 事務局

〒二二三一〇〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口二丁十一十五

岩崎ビル四F

電話

Fax

会費納入

〇四四一八一九一一八二一
一〇一八〇一七七六八〇四七一

郵便口座

代表

柴沼邦彦

ホームページ

<http://www.asd-nsa.jp>